

草多ク生ズルニ、獨リ此塚ノノミ青草生ズ。故ニ青塚ノ名アリ』云々と。此の小史述ぶる所、こゝに引く以外に於ても史傳と合せざるもの多く、もとより信を措き難けれど、明妃の墓と稱せらるゝものが黄河の北にありて、青塚と呼ばれしことは古くより知られ、唐代の語り物にも、『墳高數尺號青塚。還道軍人爲立名。只今葬在黄河北。西南望見受降城』（敦煌出土明妃傳）など見ゆ。地志綏乗の著者はこの墳墓につきて、遼史がこれをその地理志中に載せたるより、文人學士往往登臨して之を歐詠すと記せども、その由來は更に前に遡るべきなり。唐代果して數尺の高さなりしか、何時今の形に作り成されしか、共に知る由もなく、墳墓の正體もまたもとより究め難し。今摺鉢型に近きこの墓の周圍は、邦里二町弱もあらんか、高さ二十數間と目測せり。墓の南麓に清朝及び民國時代の石碑八基を建てたり。向つて右より二つ目に耆英の詩を刻せる一碑あり。戊申の秋使を豊州に奉じたる時、此墓を覩て賦したる由を跋記せり。草書の文字缺落もありて明らかならねど、

憶昔出宮闈

志在不負主

揮年去遐荒

服□無以處

悲彈馬上調

肝腸向誰吐

聲淚動天地

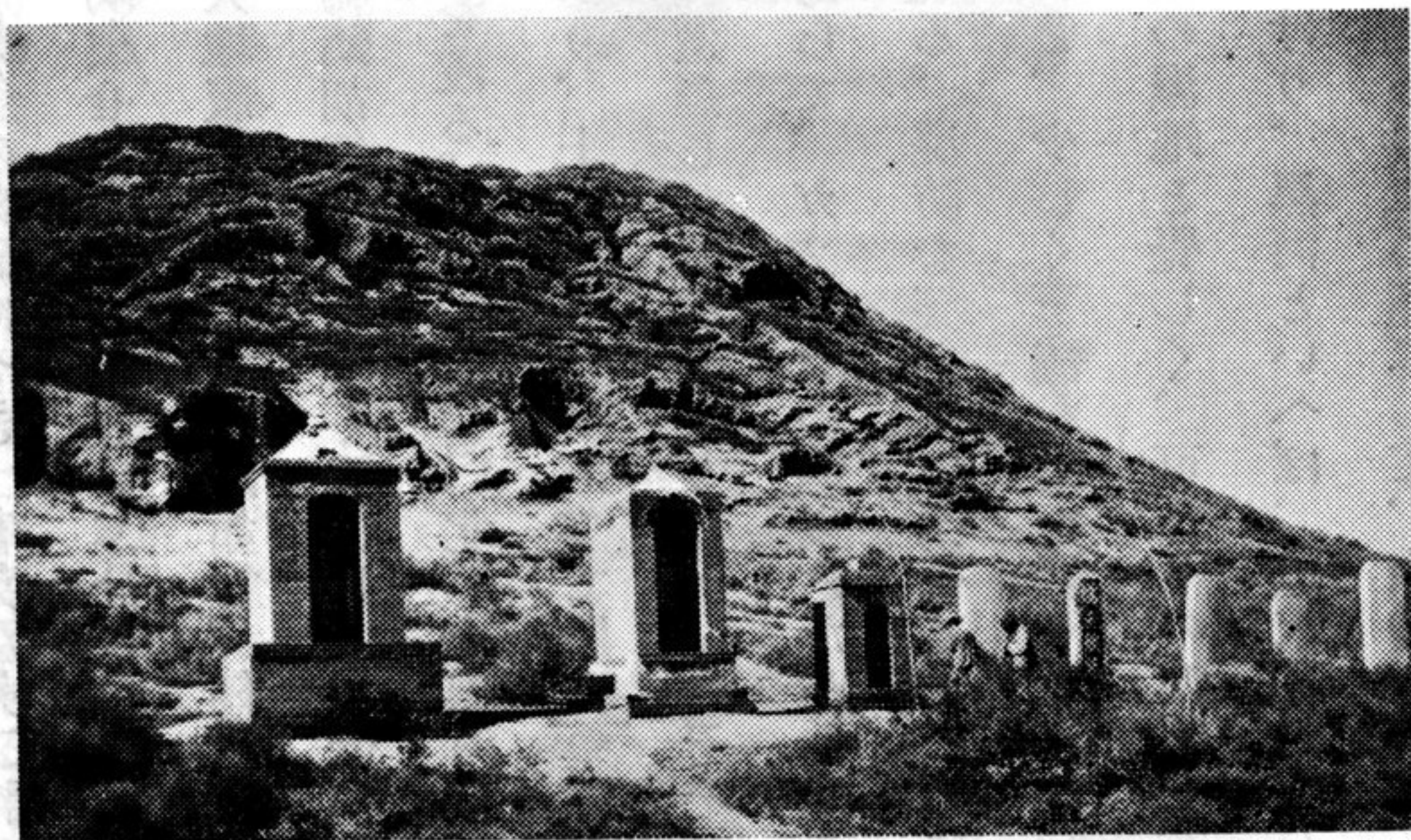
名始垂千古

邊草伴芳魂

紅顏餘朽骨

何使若有神

一坏萬世覩



三圖 青塚石碑